

No.87 沈文燮 / シン・ムン・サップ 「開く」

Shim, Moon Seup

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年6月1日付 立川市市報記事より

シム・ムンサップは韓国の作家、普通は紙や竹を使った美しい作品をつくっている。今回は鉄を使って車止めをつくった。

この作品を見ていると、韓国の古墳やそこから出土した古美術を思い出してしまう。民族の感性は時代を超えて引き継がれていくのかもしれない。

小説家の山田風太郎さんご夫妻をファーレ立川にご案内したことがあった。山田さんは人間の社会と歴史に厳しい視点を持っておられながら、奇想天外、驚天動地の小説を書く方だが、同時に、食や芸術に深い造詣を示される。よく生き、よく死を迎えようという覚悟である。

その氏がこの作品を前にして奥さんに語ったこと。「何か思い出さない。君が取り込み忘れて雨に当たったフツンのようだね。」

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

1980年代初めより、私は“大地のイメージ”、“木の精神”、“関係”というタイトルの3つのプロジェクトに専心してきました。

私は自分の作品において天然の素材—粘土、木、石—の類似性を表現しようとしてきました。様々な木片をつなぎあわせることで、物質の特性に隠された記憶を明らかにし、また石に固有の統御された沈黙を表現しようとしてきました。

ソウルの北にある総合美術館での1992年の展覧会で、私は初めて鉄の彫刻に挑戦しました。彫刻家は皆ある時点で鉄の作品に取り組むものです。ですから私は全く遅いスタートであったと認めなければなりません。それまでも常に鉄で制作したいという衝動を感じており、反射的にその作品に向かい合ったのでした。私の鉄の彫刻において、木に感じてきたのと同じ暖かさが達成されていることを願っています。

鉄は木よりもいろいろな場所に適応できると私は考えています。

私が特に鉄が好きなのは、鉄がその物質的特性のみならずその表面においても、ごく自然に時間を順応させているからです。

私の彫刻は、私が使う物質のなかに具現されたコンセプトの蓄積—感情や感覚の蓄積—であり、統合であると言うことができるかもしれません。

私の彫刻が、以前の状態から新しい存在状態をつくりだすプロセスにおいて、人類が分かち合い、人類が限りなく溶け合うことのできる接点として理解されることを願っています。